

經濟論叢

第104巻 第4・5・6号

企業分析の限界認識について……………	野村秀和	1
企業行動と市場管理……………	赤岡功	22
「ビスマルク的国有」の変容とその限界……………	重森暁	39
完全雇用政策の現実的傾向……………	森岡孝二	59

書 評

岩崎允胤『弁証法と現代社会科学』(1967)をよむ……………	出口勇藏	78
E. J. ホブスボーム 「イギリス労働史研究」(鈴木・永井訳)……………	前川嘉一	83
W. ハイน์リックス, H. ザイデル, L. ベルツリス著 「独占的商業」……………	橋本勲	88

經濟論叢 第103巻・第104巻 総目録

昭和44年10・11・12月

京都大學經濟學會

E. J. ホブスボーム

「イギリス労働史研究」(鈴木・永井訳)

前 川 嘉 一

I

周知のとおり、イギリス労働運動史研究は、ウェッブ夫妻および G. D. H. Cole の偉大な先駆的業績によって、これをひきつぎあるいは部分的に改訂する程度で、永年の研究軌跡を画いていた。研究の発展のためには、これらを批判的に分析しなおし、新たな視点をもって構成することが課題であった。これは戦後の研究において徐々に展開しはじめた。それらの研究の1つとして、The Labour Aristocracy in 19th Century Britain, in "Democracy and the Labour Movement", edited by John Saville は注目すべきものであった。筆者がはじめて E. J. Hobsbawm を知ったのはこれを介してである。それは筆者のみならず、わが国の研究者によって等しく関心が払われた¹⁾。

戦後著されたイギリス労働運動史研究 A. L. Morton and George Tate, *The British Labour Movement*, 1956 や Allen Hutt, *British Trade Unionism*, 1952, に比べて遙かに豊富且つ適確な資料にもとづき、その分析の上での展開であれば、E. J. Hobsbawm の評価は当然のことでもあった。その後 Custom, Wage and Work-Load in Nineteen Century Industry in, "Essays in Labour History", edited by ASA Briggs and John Saville をみるに及んで、いよいよ彼の研究について関心は高まるとともに、彼に Monograph の刊行を待望した。それは、前記論文をふくめた "Labour Men" *Studies in the History of Labour* として1964年実現した。そして早速、昨年末「イギリス労働運動史研究」として鈴木、永井両氏による訳業が完成し、刊行されたのである。

II

ところで、本書は著者もことわっているように「まとまりのある著作でなく、さまざまな時期に、さまざまな種類の刊行物のために書かれた研究の収録」であって、いわば論文集ではあるが、それらに貫くテーマは「イギリス労働者階級の歴史と諸問題」すなわち、彼によれば「労働者階級それじたい(労働者階級の組織および講運動とは区別さ

1) 鼓肇雄「ホブスバウム〈19世紀イギリスにおける労働家族制〉」(経済科学, 第4巻第3号), 鈴木幹久「19世紀イギリス労働組合運動の構造」(名城商学, 第17巻第2号)など。

れた)についての、また労働運動が効果のあるものとなることを可能にしたり、さまたげたりした経済的技術的条件についての業績」(序文)を目指すものである。それ故に、著者は *Labour Men* の書名を付したのである。

本書はつぎの18の論文からなっている。すなわち(1)トマス・ペイン、(2)機械破壊者たち、(3)メソディズムとブリテンにおける革命の脅威、(4)遍歴職人、(5)ブリテンの生活水準、1790—1850、(6)歴史と「くらい劣悪な工場」、(7)生活水準論争、補遺 (8)1800年以降の経済的変動と若干の社会運動、(9)ブリテンのガス労働者、1873—1914年、(10)ブリテンの一般労働組合、1889—1914年、(11)港湾の全国組合、(12)ハインドマンと社会民主連盟、(13)マルクス博士とヴィクトリア時代の批判家、(14)フェイビアン主義者の再検討、(15)19世紀ブリテンにおける労働貴族層、(16)1850年以降のブリテンの労働運動における諸傾向、(17)19世紀の産業における慣習、賃金および労働負担(18)労働者の伝統——以上である。著者はこれらを4グループの構成と考える。すなわち、

I 19世紀なかばまで

II 1899—1914年の「新組合運動」の研究

III ブリテンにおける19世紀後期の社会主義の復活の諸研究

IV 広範な時代領域にまたがる一般的諸論文

である。

限られた紙幅において、これらのすべてに亘って内容を紹介することは困難である。したがって、筆者がこれまで専攻してきた同一領域すなわち前記IIを中心にして以下紹介を試みることにしたい。

III

19世紀イギリスの労働組合運動の概括的把握は、周知のとおり、ウェップ夫妻の研究を基軸としあ継承されていることが多い。それは、クラフト・ユニオン→新型組合、すなわち Old Trade Unionism→New Trade Unionism とするものであって²⁾、この場合、組合運動の主体を Skilled worker→Labourer と考えることに照応する。いうまでもないが、労働組合運動の発展の考察には主体側面の構造分析を欠如することは許されない。労働者階級は、資本に対し、すべて包括的に同質的存在として運動に関わるものではない。

資本は賃労働を統轄するために、常にその分断支配を試みるものであり、且産業技術の上からいって、労働者階級は本質的には別として、現実的存在としては階層性を形成する。したがって、19世紀イギリス労働運動史をる場合、19世紀イギリス労働者階級の構

2) H. A. Turner が Closed Union→Open Union と考えているのは注目に値する。

造を基本的にどう考えるか、が問題とならざるをえない。そこでホブスボームは労働者階級の基本的範疇を「労働貴族」(Aristocrat) 対「一般労働者」(Labourer) と捉え、19世紀労働組合の原流は、前者の上に構築されたものであれば、その「労働貴族層」を極めて慎重な態度をもって究明しようとする。諸論文のなかでも「19世紀ブリテンにおける労働貴族層」は卓越したものと言ってよいであろう。

「労働貴族」の一般的な概念像は、およそ植民地収奪を主要な土台にして実現された巨大な超過利潤の分配にあづかる労働者上層部分として、体制内の改良主義部分とみるものである。

もとよりこの概念が重要な意味をもつのは、レーニンも指摘するように、帝国主義段階においてである。世界資本主義の潰滅から革命の必然性を提示することが問題である場合、労働貴族の問題も、またこの地点から考えられねばならなかった。革命戦略から必然的に導かれるかたちで、敵対する階級の、そしてとりわけ労働者階級の階級構造とそれぞれの構成部分の政治的傾向が明かにされねばならなかった。したがって、「労働貴族」＝反革命部分、本来のプロレタリアート＝革命部分、として定置されてきたのである。既存の議論の多くは前述の歴史的、政治的に限定をうけた労働貴族論を絶対的な命題として考えてきた。そこに労働貴族論の政治主義傾向があった。

ホブスボームの労働貴族論は——既存の理論家たちが労働貴族を、独占資本の帝国主義「政策」の結果としてみるのとはちがって、——賃労働としての労働者社会的存在が資本主義の現実の歴史のなかで生成する場合に必然的に生みださずにはおかぬ社会層として労働貴族を考える。そして、労働貴族の分析は、下部構造の支配の優先を説く史的唯物論の公式に一定の賛意を示しながらも、決してこれに束縛されない。彼は、社会的伝統、慣習という上部構造が被規定的存在ではなく、まさしく、独自の規定的役割を果たすことを示している。前帝国主義段階において「完全に手工労働者からなっていた労働貴族層」——(いわゆる古い型の労働貴族)(p. 248)は、クラフト・ユニオンを構成するものであり、そのいみで、この段階での労働運動の主たる担い手であったが、1890—1814年の時期には、彼らは「機械との競争と階層の没落のおそれを感じはじめた」(p. 264)。古い労働貴族層の衰退要因を、彼はつぎのように述べる。すなわち、(1)従来労働貴族の本拠であった19世紀基幹産業地区の不況化、(2)賃金体系の変化、(3)出来高払い半熟練機械操作工の抬頭、(4)ホワイト・カラー階層の継続的成長。これら要因による労働貴族層の没落は、彼らによって構築され、その直接的交渉力、希少価値と〈入職〉規制能力に依存していたクラフト・ユニオンの衰退を招来した。

そこに、いわゆる新組合運動(New Trade Unionism)が労働平民である Labourer によって19世紀末生成した。一般労働組の成立とその運動展開である。それ故ホブスボ

ームも19世紀の労働運動史研究で当然一般労働組合に焦点を向けることになる。これは「ブリテンの一般労働組合、1889—1914」を中心に「ブリテンのガス労働者」「港湾の全国組合」の一連の諸論文によって展開されている。

IV

1889年の一般労働組合の創設者は「一般労働者」である。彼によれば、労働貴族層と厳格に区分される一般労働者とは、たんに労働の一般的価値をもったにすぎず、「無差別の、またいかなる特定職業にもむすびつけられていない粗放ないし不熟練労働の一般大衆」(p. 167)。そして、「熟練労働者のようには、さまざまな規制手段によって、一定の希少価値をささえ、それによって、かれらの価格を維持することができない」(p. 165)のものであった。

しかし彼は、一般労働者を総括的に把握して、彼らが一般組合を形成したのだと論断することはしない。一般労働者の内容構造をさらに究明する。たとえば、ガス一般組合においては、そのなかの基幹労働者であり、交渉上の立場において強力である給炭夫および火夫を組合の中核と考え(p. 147)、港湾全国組合においてはあらかじめ定められる中核は存在しないが、例えばプリストルではふ頭労働者と船荷積夫、ハーリッジでは鉄道労働者といった、それぞれの時期および場所で半職人的基礎のうえに中核があったと考える、それは、「労働貴族層」からみれば下層の一部分として見なされていたが、当該産業の賃労働構造のなかでは、相対的に上位の、重要な部分である。彼は、組合の生成、発展にそのような中核的存在が不可欠に必要だと判断する。それにしても、彼らが、伝統と自らの不規則労働の耐えがたいおもいを克服するため、19世紀末、どうして突如として運動を展開することになったのか。そのために「かなりの衝撃が必要であった」(p. 149)とし、その衝撃の本性は「労働強化」であって、著者はこれを産業技術の発展に対応せしめて詳論する(p. 149-151)。では一般労働組合が1889年から急速に成長したが、なぜ数年にして衰退したのか、またそのなかで運輸、一般労働者組合および一般自治体労働者組合が現代イギリス労働組合員全体の $\frac{1}{4}$ を占める勢力として発展存続してきたのかが問われねばならない。

彼によれば、「本来、浮動的な、あるいは移動しがちな労働者は、たとえ熟練〔労働者〕であっても、レセ・フェニルの条件のもとでは、組織することがおそろしく困難であった」(p. 169)のであり、したがって、一般労働者によって保持される職業独占は、当初から疑問視されていた。一般労働組合は、相対的に外部の刺激によって爆発をうみだしたものの、はじめに意図した労働者よりも、もっと安定した、もっと規則的な型の労働者に依存して、雇用者からの承認を獲得することに戦術を転換するかどうか一般

労働者組合存続の鍵であった、という。換言すれば、半熟練労働者が組織中核として標準賃金率および標準労働条件を規制し、多様な地方的部門別交渉機能の「もとじめ」として活動することが必要だった。この方策が一般労働者組合の存続発展を可能にした。まさに、運輸一般労働組合および一般自治体労働者組合がそうである、とみる。かくして、「一般組合は永久的なものとなった」(p. 104)のである。

では一般労働組合の発展をどう評価するのか。一般労働組合は、このような発展過程で下部大衆は受動的に右に流れ、イギリス労働運動の伝統的付着物を維持するにとどまり、安定繁栄する資本主義および労働運動の公式承認という条件のもとで、改良主義に成型されていったとしても「左翼がつねに運動内部において、たとえ非革命的だとしても現実的機能を、すなわち改良主義を効果的に改良主義的にするという機能をもっていた」(p. 300)というのはここにも妥当するであろう。もとより彼は運動がたんなる改良主義におちいらないようにするためには「より高度の政治主義、特利の努力が必要である」(p. 302)と付加する。

かくして、著者は運動の一般的傾向についてつぎのように言う。「一連のジグザグの曲線をとおして……急激な前進の時期がかなり保守主義あるいは絶対的後退のべつの時期にひきつがれて」(p. 286) 現段階に至り、決して一直線の軌跡をえがくものではない。その発展過程を極めて豊富な資料を消化して、確かな視点から、特に賃労働それ自体の構造分析の上にイギリス労働運動史研究の展開を試みた本書はウェブとレーニンの間隙を埋めるものとして重要な意味をもつものと評価しなければならない。

訳文について多少の生硬を感じさせないでもないが、この困難な訳業にあたられた訳者および、本書のような専門書を敢えて刊行された出版社に、専攻者の一人として敬意を表したい。(E・J・ホブスボーム著、鈴木幹久・永井義雄訳「イギリス労働運動史」昭和43年10月刊、ミネルヴァ書房。)